

令和7年度 茨田中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)		平均IRTスコア	
			国語	数学	国語	数学	理科	
3年 4月17日	学校	241	52	45	6.3	11.9	学校	508
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2	大阪市	489
	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6	全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2 中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3年 9月3日	学校	242	66.7	55.1	55.6	46.4	55.4	5.6	5.6	11.2	8.5	7.2
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4

※ 3年生の理科はB問題を選択

令和7年度 茨田中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

3年チャレンジテスト

(成果と課題)

【国語】

全体として対大阪府平均より2.5ポイント高い結果となった。また無回答率が低いことも、生徒たちの努力の成果だといえる。すべての観点で大阪府平均より上回っており、特に、前年度大阪府平均より下回っていた「書くこと」の観点において大阪府平均を上回っていることは、書き方を工夫しながら授業で取り組んできた成果だといえる。

課題としては、「言葉の特徴や使い方」の観点において、基本的な知識技能が身につけていない生徒が一定数いることである。授業のなかに復習を交えながら受験までに知識の定着を図る必要がある。

【社会】今年度のチャレンジテストの結果は、平均点55.8点となり、平均点で3.9ポイント上回り、対府平均1.08という結果となった。昨年2年時の結果は対府平均1.09であったため、結果としてはほぼ前回同等のものとなった。しかし、無解答率は昨年度の対府平均0.62から上回る対府平均0.86となり、過去3年間の3年生の中では一番低いとはいえ、上昇した結果となった。また、歴史的分野の得点率が昨年度と同等だったのに対し、地理的分野における得点率の対府平均が、1.10から1.06へとやや下がっていた。地理的分野の復習が十分とは言えない現状がうかがえる。一方、思考・判断・表現の問いへの正答率は、昨年度対府平均1.08から、今年度は1.10へと好転していた。とくに3年時に入ってから、全単元学年全体で単元を貫く問いを設定し、資料や話し合いをもとにしっかりと考察する時間を多く取り入れていた成果であると考えられる。

【数学】平均は55.6点で、大阪府平均に比べ+1.7点であった。どの領域も、大阪府平均に比べ高く、また、観点別にみると、「思考・判断・表現」で、大阪府平均に比べ、+0.8点であり、難しい問題に対しても、粘り強く取り組んだ。昨年度の成績と比較をしても、大きく大阪府平均を上回ったので、今年度、生徒たちが意欲的に数学の学習を行ったのではないかと考える。特に、得点が1桁の生徒が全体の0.5%という結果だったので、数学に対し、苦手意識を持っている生徒も、今年度、数学の学習を主体的に取り組めた。

【理科】3年生理科において、本校の平均による対大阪府比は1.01と、大阪府平均を0.01ポイント上回った。普段から実験、観察を授業の中で取り組んでいる成果が見られる。

・「エネルギー」「粒子」「生命」分野は、大阪府平均を上回ったが、「地球」分野では0.2ポイント下回った。・無回答率については、大阪府平均と比べ0.77ポイントと大きく下回った。生徒質問紙においても「難しいことがあっても、あきらめない。」では、肯定的な回答が大阪府平均よりも1.3ポイント高い。

・「知識・技能」は大阪府平均を0.9ポイント上回っているが、「思考・判断・表現」の問題では0.5ポイント大阪府平均を下回っている。

・正答率が低い問題に関しては、理科で使う用語を理解し、覚えないと正答できない問題と、公式を覚えて計算する問題があげられた。

【英語】5領域の中で「聞くこと」と「読むこと」の問題では、府平均を上回り、三ヶ年で最も得点率を高くすることができた。一方で、「書くこと」の問題では府平均を下回り、三ヶ年で最も得点率が低くなってしまった。

この点について、「知識・技能」の問題の得点率と「短答式」の問題の得点率が下がっていることを踏まえると、基本的な事項から、書いて答えられるようになることが今後の課題と言える。

(今後に向けて)

【国語】知識及び技能の観点において、資料から正確な情報を読みとったり、そこから自分の考えを深めたりする力をつけさせたい。そのためにICT教材も効果的に活用していく必要がある。また、思考力、判断力、表現力等の観点において、継続して「書くこと」に力をいれた指導をしていきたい。具体的には形式を工夫しながら、生徒たちの「書くこと」に対する抵抗感を減らしていきたい。自分の意見をしっかりと持ち、他者の意見をしるなかでさらに深めていけるような、主体的・協同的な学びを目指していきたい。全体的にこれまでの学習を振り返る時間を取り入れながら、生徒たちが進んで国語を学習できる環境づくりにつとめたい。

【社会】無解答率の上昇に関しては、7月実施の学校アンケートにおいても「社会の学習はわかる」というアンケート項目における肯定的回答のポイントが昨年度末よりも低下していることとも関連していると思われる。この結果から、普段の授業内容への理解度の低下、それによる学習に取り組む意欲の低下などがうかがえる。毎授業における問いや目標が、生徒たちの実態に沿うものになっているか、見直しと再設定を行っていききたい。地理的分野では、生徒たち自身が忘れてしまっている内容が多くあると考えられることから、重点的な反復を促すアプローチをしていきたい。

【数学】テスト結果を振り返り、自分の課題に合わせて取り組む機会を設ける。全体的に、「関数」分野の、特に、「グラフの読み取り」の問題の正答率が低かったため、別の類似問題を準備し、習熟別に、学習させる。一方、記述式の問題に、頑張っただけの生徒も多いので、これからどんどん発展的な問題にも取り組ませ、受験に向けた、実力がつくような問題にも取り組ませる。

【理科】「思考・判断・表現」の問題の正答率を上げるために、自分の考えを整理する機会を増やしていく必要がある。実力テストや授業での問題演習を通して定着をはかる。

・理科で使う用語を理解し定着をはかるため、2学期より、3年間で学習した用語の復習を授業の中で定期的に行っている。また、実力テストを受ける前の週には用語を確認する課題に取り組ませ、毎回復習できるように工夫しているところである。

・問題解決にあたって、粘り強く取り組んでいく姿勢を身に付けさせなければならないため、定期テストの課題や授業プリントへの取り組みが徹底できるように声掛けを継続的に行う。

【英語】「聞くこと」と「読むこと」の領域の問題で府平均を上回っていることから、これまで「聞くこと」や「読むこと」に力を入れてきた授業の成果が出ていると言えるが、課題解決に向けて、「書くこと」にも重点を入れた授業づくりを考えていかなければならない。